本実践・研究から見えてくること

研究協力者 佐藤 修司
（秋田大学大学院教育学研究科教職実践専攻）

よりよい人間関係を形成する学級活動

１．学習展開とそのための工夫

特別活動の中の学級活動は、学校、学級における生活のドラマを豊かにすることで、教科等の学びのドラマを支える条件を作り出すものである。子どもたちが自己を学び見つめ直す過程と、友だちを理解、共感、受容し、関係性を紡ぎ直す過程があいまって展開する。本単元では、児童への意見募集の結果、学級内での「協力」に課題があることが分かったことから、活動題を「だれとでも協力し合える集会をしよう」とした。

前時では「お試し」の活動を絞り込み、その後の休み時間にお試し活動を行ってみて、感想や意見をシートに書き込んでもらっている。お試し活動は、ポートボール、こおり鬼、風船列車、「アインシュタインの言葉」の四つであった。本時では、まず四つの活動のそれぞれの代表者が、活動してみての結果として、本活動として取り上げるべき理由などをプレゼンしてもらった。目的に沿っているか、メリットは何か、デメリットは何かを考えて、メリットについてはそれをさらに伸ばし、デメリットについては解決する方策についても触れられていた。その後、各活動についての質疑、意見交換を行い、改善案も含めて検討が行われ、活動内容が決定された。結果的に、四つの活動すべてが採用されることになった。

全体として、自己の学びを見つめ直す規準が自覚され、見通しを持ちながらよりよく問題を解決する学習過程が成立していた。また、自分事として問題解決に向かう姿が見られ、必然性を伴った学びの見つめ直しが実現していたことも良かった点である。

２．展開の工夫と手立て

気になったところとしては、第一に、活動の一つである「ポートボール」が挙げられる。他の活動と違い、前時でも、本時でも賛成と反対が拮抗している状態が続いていた。得意不得意がはっきりと分かれ、対立など協力とは反する状況が生まれやすいことなどが反対の理由として挙げられていた。代表者がアピールするはずの段でも、賛成ではなく、反対の理由を述べるというイレギュラーが生じていた。

第二は、協議の中で、それぞれの活動について、そのデメリットを解消ないし軽減する提案が児童からいくつかなされていたところ、その点の確認が行われないままに終了していた。この点の確認が終盤で必要であったように思われる。

第三は、納得度メーターで、昨年度と同様に、個々の児童が表示するだけでなく、全体を集計するようなことができなかった。ソフトの開発が必要なところであり、課題として残された。

３．ワークショップを組み込んだ協議

今回初めてワークショップを協議の中に組み込んだ。授業者の説明、質疑の後、２，３名ごとの４グループに分かれ、児童が提案した四つの活動をそれぞれのグループが担当して優位性を考え、プレゼンする活動を行った。また、活動の内の一つである「アインシュタインの言葉」を実際に体験してみた。その後に本授業に関する協議を行ったが、これまでとは違って、参加者自身が児童の思考過程、合意形成過程、意思決定過程を追体験することができたことで、問題が参加者の「自分事」としてとらえられ、協議が深まったように感じられた。